



愛欲の果て

りん

始まり。

私の全ては、もう壊れてしまった。

彼の愛に溺れ、彼のぬくもりが今も忘れられない。

愛欲の果て・・・

私に何が残ってるのだろうか？

彼に出会わなければ・・・

私に夫がいなければ・・・

彼に妻がいなければ・・・

身も心も彼に奪われたまま、時間が止まってしまった。

彼とは、上司と部下の関係だった。

仕事のできる彼を私はずっと尊敬していた。

そして、がむしやりに頑張る私を、彼は優しく、時には厳しく見守ってくれた。

私は彼に対し、次第に愛敬の念を抱くようになっていった。

仕事に没頭していった私は、夫とも疎遠になっていった。

それを取って代わるかのように、彼と過ごす時間が増えていった。

そんなある日、1通のメールが届く。

彼からだ。

「笑実、君の事が好きだ。私と付き合っただけがいい。」

私は、部長からの軽い冗談かと思いつつも、動揺は隠せなかった。

しかし、軽くあしらひ、業務を続けた。

残業を終え、帰宅する毎日。

夫は、相変わらずテレビに向かっている。

ベッドを共にしても、仕方なく求めに応じるのが当たり前になっていた。

淡々と過ぎる毎日。

仕事に生きがいを求めるようになっていった。

でも、頭の片隅には、

「笑実が好きだ。」

という、彼の言葉を拠り所にしていった。

そして、運命の日が訪れる。

私の全てが狂ってしまった日。

そして、彼への愛欲に溺れていった日。

会社の飲み会があった。

いつもと変わらず同僚と盛り上がる。

2次会、3次会・・・

気がつくと、部長と2人きりになっていた。

会社での彼とは、違う顔がそこにある。

「笑実、ずっと君を愛していた。私のものになってくれ。」

強引なまでの彼の言葉に、私は流されてしまった。

お酒の力もあったのかもしれない。

彼の力強いその腕になすがままの私。

なぜだろう？ こんな気持ちは、初めてだ。

衝動。

私は初めて、彼に抱かれた。
私が私ではないような感覚に襲われる。
そして、気がついたら、何度も激しく彼を求めていた。
夫とは違う。
熱いものを感じる。

この日以来、私は彼を愛してしまった。
夫がいるにも関わらず・・・。
欲望のままに。

社内では、あくまでも上司と部下。
誰にも知られてはいけない2人だけの秘密。
それが、またさらに情熱をかき立てた。
そして時間さえあれば、逢瀬を繰り返した。
感情がエスカレートしていく。
毎日のように届く彼からのメール。
「俺の笑実。愛してるよ。」
仕事中でも、どこにいても、
「笑実、今すぐにも君が欲しい。」
「笑実、君とキスがしたい。」
どの言葉も新鮮で、心に響く。
そして、そんな彼をととても愛おしく感じるようになった。
まるで、子どものよう・・・。

そして、私の体の中が火照っていく。
彼が欲しい。

毎日が楽しくて仕方がない。
もし、週末が休みでも、
月曜日、会社に行けば彼に会える。

そして、彼が思いがけない提案をしてきた。
「笑実、一緒に暮らせるようにどこかに部屋を借りよう！」
驚いた私は、一瞬言葉を失った。
「それを目標に2人で少しずつでも貯金しないか？」
嬉しかった。
心からそう思った。
その時、夫や彼の奥様の事を考える余裕が、
私には、なかった。
次第に私は、彼との生活を夢見るようになっていった。

彼が耳元で囁く。
「愛してるよ。」
その言葉がとても心地よく感じた。
それに呼応するかのようには、私の体も熱を帯びていく・・・。
「部長・・・」小さく、吐息にも似た言葉が漏れる。
そして、それがいつしか激しい息づかいへと変わっていった・・・

動揺。

部長に、

「笑実、一緒に暮らせるようにどこかに部屋を借りよう!」
そう言われてから、2人の仲はいつそう深まったように感じた。
そして同時に、彼のヤキモチも、次第にエスカレートしていった。
同僚の男性だったり、得意先の男性であったり・・・
「ちょっと仲良くし過ぎじゃないのか？」
「君は、ああいう男がタイプだったのか？」
そう言われる言葉さえ、心地よく感じた。
「そう・・・私は愛されてるんだ」と・・・。

私は、運命の出会いだと確信していた。

少しでも離れていたら、不安でどうしようもなくなる。

家に帰って、夫が求めてきても応じる事ができなくなっていた。
家庭内に不穏な空気が流れる。
しかし、そんな事でさえ私にとっては、もうどうでもよくなっていた。
「だって私は、いつか彼と暮らすようになるのだから。」
私の心の中は、完全に彼に支配されていた。
次第に、抜け出せない深みへとハマっていく。

彼といる時だけが幸せに思えた。
しかし、そんな幸せが長く続くはずがない。

仕事が終わりに、いつものホテルへと直行する。
そこには彼が待っている。
私の胸は高鳴るばかり。まるで不安をかき消すかのように。
部屋に入るやいなや2人は激しく抱き合い、
そして濃厚なキスを交わす。
会えない時間を埋めるかのように、お互いを求め合った。
もう、どうなってもいい・・・。
そんな気持ちが脳裏をよぎる。

熱い余韻を残しながら、彼の車に乗り込む。
でも彼は、何事もなかったかのように、仕事の話始める。
いつものように、私の自宅近くに車を止め、
しばらくそこで話をする。
帰り際、軽くキスを交わし、足早に自宅へと向かう。

部屋に入ると、夫が待っていた。
夫は、絞りだすような低い声で、私に声をかけてきた。
「お前、最近・・・俺に何か隠し事をしてないか？」
一瞬で私は凍りついた。
言葉が出ない・・・。

夫。

彼との情事を終え、家に変えると、

夫が、こう切り出してきた・・・

「お前、最近・・・俺に何か隠し事をしてないか？」

私は、慌てた。

平静を装いながら、軽くあしらおうと、

「な・・・、何言ってるの？隠し事なんて別にないけど！」

そう言って、夫の前を立ち去ろうとした。

しかし、夫は納得がいかなかったのか、

さらに、私を責め立てるように言った。

「お前最近、何か変だぞ！！」

しばらくの間、押し問答を繰り返した。

そして、ついに私は、言うてはいけない言葉を口にしてしまった。

絶句する夫。

私の中では、

「これで夫と離婚して、あの人と一緒にくらせる！」と、

安易な考えを巡らせていた。

後に、どれほど後悔する事になるか、この時は考えもしなかった。

激昂する夫と夜通し話し合いを行った。

普段は、見たこともないような夫の姿。

夫は、たまりかねて私に手を上げる。

その間も、ずっと部長のことばかりを考えていた。

彼がいてくれるなら、私はどんなことにも耐えられる。

赤く腫れ上がった顔を冷やしながら、眠れない夜を過ごす。

「彼に逢いたい。」ひたすら、そう思い朝を待った。

翌日、怒りのおさまらない夫は、私の制止を振り切り、

職場に電話をした。

そして、専務に私達の身に起きた事、全てをぶちまけた。

私の中で、何かが音を出して崩れ始めた。

どうにかして部長と連絡を取るすべがないか、考えを張り巡らす。

その日の午後、

私達夫婦と、彼と専務の4人で話し合いをすることになった。

慟哭。

私たちの関係が、夫にバレてしまった。

でも、私はどこかスッキリした気持ちになっていた。

「これで、彼がちゃんと話してくれれば、夫と別れて彼のもとへ行ける」

私と夫と彼と専務の4人で話し合いが始まった。

事実関係を確認する専務。

荒れる夫。

気が付くと私の目からは、涙が溢れていた。

夫は専務に対し、たまらず声を荒げた。

「あなた方は、いったいどんな教育をしてるんだ！」

「上司が部下である女性に手を出すなんて！！」

すると彼が、男らしい仕草で話を切り出す。

「この度は、申し訳ございませんでした！」

深々と頭を下げる部長。

「今後、ご主人とお話をさせていただき、2度と奥様とはお会いしない事をお約束いたします。」

・・・?!今、何て？

私は、動揺を隠せなかった。

何かが音を立てて崩れ始めた気がした。

心の中がざわざわする....

話し合いなんて、もうどうでもよかった....

私たちは、どうなってしまうんだろう？

部長・・・。私の頭の中はぐちゃぐちゃになってしまった。

しばらくして私は、先に家に帰された。

どうやら、その後、部長と夫は2人で話し合ったようだ。

ドカドカと大きな音を立てながら帰宅する夫。

「あの男、最低な奴だぞ！」

そう言いながら部屋に入ってくる。

「俺が、奴の嫁の電話番号を聞き出そうとしたけど、絶対に教えてくれなかった...」

混乱する私をしり目に、小馬鹿にしたような表情で夫は話を続ける。

「俺は、痛み分けだと言ってやったんだ」

「けど、奴は...それだけは勘弁してくって、俺に何度も頭を下げやがった！」

「お前、あんな奴のどこがいいんだ？」

「奴は、お前より家族の方が大事なんだってよ！」

目の前でまくしたてる夫。

私は、夫が何を言ってるのか理解できないでいた。

彼がそんなことを言うなんて・・・

私は、どうにかして彼と連絡を取る方法を考える。

私は、まだ彼の事を信じている。

私は....

会社では、監視されることになってしまっていた。

そして、2人の歯車は大きく狂い始める。

愛欲の果て

私たちの関係が夫にも会社にも知られることになってしまった。

しかし、そんなことはどうでもよかった。

私は、彼に会ってどうしても確かめたい。

私の心は完全に部長に支配されている。

そんな時、携帯が光る。部長からのメール・・・。

監視の目を盗み、彼はメールを送ってきてくれた。

私の心は一気に高鳴る！

トイレに駆け込み、すぐさまメールを確認する。

「笑実、すまなかった。仕事が終わったらいつものところで待つ」

体が熱くなるのを感じる。

ああ...こんなにも私は彼を求めているのかと...

夫は、相変わらず彼を馬鹿にする話を繰り返し、高笑いで私を追い詰める。

あの家に私の居場所なんてない。

そんな事を考えながら、彼の待つホテルへと車を走らせる。

そして、彼の姿を見るなり私は...

気が付くと2人はベッドの上に倒れこんでいた。

空白の時間を埋めるように激しくお互いを求めあった。

しばらくして、彼は私が想像もしてなかった言葉を口にする。

「笑実、君との関係はこれで最後だ。」

「俺は、違う部署に配属されることになった。」

.....

沈黙が、流れる。まるで時が止まったように。

「全く、君の旦那はどうかしてるよ！」

「会社にまで押しかけるなんて迷惑な話しだ...。」

淡々とした静かな口調で、彼は夫を責める。

「もう、会えないの・・・？」

なんとか、絞り出した言葉。

彼は、黙ったままだった。

事態を呑み込めない私は、まるで凍りついた地面にたっているようだった。

死んだように家に帰り着く。

夫と顔を合わせたくない。

もう誰の顔も見たくない。

私の時間は、そこで止まってしまった。

次の日の朝、課長に呼び出された私は、厳しい現実を突きつけられた。

「悪いが、今回の件の処分という事で、君に辞令が出ているんだが…。」

少し、ぎこちない口調でそう切り出す。

「うちの子会社に行ってもらおうという事で話が決まった。」

私は、何もかも失ってしまった・・・

事の重大さを認識するのにどれくらいの時間がかかったのだろうか？

全てを許すと言ってくれた夫を私は受け入れることができないでいる。

私の心は、まだ彼に支配されたまま動くことができない。

彼は、新しい人生を歩き出した。

なぜ私だけこんな罰を受けないといけないのか？

いろんな事が頭を巡る。

そんな折、知人を介し彼から携帯電話が届いた。

2人だけの連絡用だ。

私の体が必要な時だけ、彼から呼び出される。

結局彼は、奥さんと別れる事もなく私との逢瀬を繰り返すだけ。

私は、彼にとって単なる都合のいい女にすぎない。

そうわかっているのに彼の求めに応じる。

いつまた夫にバレるやも知らず、未だこの関係は続いている。

彼はもう昔の部長ではなくなっていた。

それでも私は、彼を求める。

彼という呪縛に囚われたまま私の時は止まってしまった。

この暗闇はいつまで続くのだろうか・・・？